「訓練校で思うこと」

やきもの図案科　　佐方　陽子

陶工訓練校に通い始めて四ヶ月が経とうとしています。現在私は、松竹梅の下絵付けに取り組んでいます。うつわの素地に絵を描くことの難しさを日々痛感すると同時に、それ以上の楽しさを実感しながら訓練に励んでいます。

入校して始めの二ヶ月間は、うつわの素地ではなく、墨を使った紙上での訓練を先生方に指導して頂きました。紙の上に墨を用いて字を書いたことはあっても、絵を描くことは経験したことがありませんでしたが、慣れ親しんだ道具を使っての訓練ということもあり、出来るものだろうと高を括っていました。しかし、実際取り組んでみると、筆で短い直線を引くことすらままならず、とても情けなく感じました。

訓練を受ける上で驚いたことは、先生方の熱心なご指導でした。訓練生一人一人に対して、各々の持つ問題点を解決に導けるよう、多くの時間を使って丁寧に指導して頂きました。始めのうちはなかなか指先や手首の使い方が定まらず苦労しましたが、先生方のご指導のお陰でひとつひとつ克服しながら課題を達成していくことが出来ました。

ひとつの線をとってみても、太さや強弱、また終筆の具合によっても雰囲気が全く違うものとなり、様々な表現が可能となります。しかし、それは一つの図柄を仕上げる上で、一本でもいい加減な線があると全体の印象が崩れてしまうということにも繋がり、その線を修正する為の作業が必要になります。ここでの訓練を通して、改めて一つの線やパーツの重要性を学ぶことが出来ました。このことは絵付けだけに限ったことではなく、人間関係や生活習慣にも通じることでもあると感じます。

陶磁器関係の事業所への就職を目指して、訓練校での残りの時間を無駄にすることなく将来、一人前の絵付師として働くことが出来るよう、技術の習得と同時に、どんなに小さな点であっても、細部にまで気を配れる人間になれるよう、日々精進していきたいと思います。